

白隠慧鶴筆「大日如来像」に関する考察

かきざわ かほ
柿澤 香穂 (早稲田大学)発表
要
旨17
時
5
分
|
17
時
45
分松
ヶ
崎
・
西
キ
ャ
ン
パ
ス
内
セ
ン
タ
ー
ホ
ール

臨済宗中興の祖と称される白隠慧鶴(1685-1768)は、宗教者であると同時に多くの書画を残した。その生涯に揮毫した作品は1万点を超えるともいわれるが、大日如来を描いた作例はこれまでに確認されていない。本発表では、このたび新出を見た白隠慧鶴筆「大日如来像」について、その制作背景や作品に込められた思想的意味を考察する。

「大日如来像」は画面上部に「南無中央大日如来」の名号を墨書し、その下に、道教風の装いで、向かって斜め左を向き、岩場の蓮華座に坐す尊像が描かれている。通常、大日如来像は正面を向き、胎蔵界では法界定印、金剛界では智拳印を結ぶ姿が一般的である。本作の尊像は、印相が智拳印であることや上部の名号から、確かに大日如来であることが明らかであるものの、正面観ではないこと、岩場に坐すこと、そして壽の字が記された特徴的な冠(以下「壽字冠」と略記する)と道服を身に纏う点で、通常の大日如来の姿とは著しく異なる。さらに、白隠の現存絵画遺品の中で大日如来を描いたものが本作以外見出されていないことから、本作は白隠の画業においても特異な例であるといえる。

そこで本発表では特徴的な壽字冠の表現に着目し、このモチーフが白隠作品において大黒天や渡唐天神等の神に分類される画像に使用されていることから、本作にも神のイメージが内包されている可能性を提示する。さらにその制作背景として、寛延4(1751)年、白隠が岡山巡錫に際し、庭瀬の松林寺で見た伝天照大神自画賛「神影図」からの影響を指摘する。

松林寺に現存する「神影図」との出会いは、神仏習合を説く白隠の著書『仮名菴』の中で、出家の機縁にも劣らぬ衝撃を受けた事件として語られている。「神影図」の制作年代は泉武夫氏によって15世紀頃と推定されており、その上部には「天照太神御作」と題して、大日如来を天照大神や観音菩薩と同一であると説く七言六句の偈頌が記されている。すなわち、「神影図」と白隠筆「大日如来像」は、大日如来を本地仏としながら別の神の姿を表現している点で共通し、さらに本作の大日如来が坐す岩場の構図が白隠の観音図と類似することから、「神影図」の賛を意識して制作された可能性があると考えられる。

白隠筆「大日如来像」の制作時期はその画風から宝暦前期と推定でき、「神影図」体験直後の作であった可能性が高い。加えて、本年に入って「神影図」と同文の偈頌を揮毫した白隠83歳時の墨蹟も新出し、「神影図」との巡り合いは、生涯を通して白隠の書画に影響をもち続けた重要な画期であったと思われる。以上のことから、両作には深いつながりがあるものと考えられる。また本作の尊像が道教的な装いで表されており、どこか十王を想起させるものであることを糸口に、白隠の地獄観との関わりについても言及し、ひいては白隠作品に込められた神儒道仏に及ぶ重層的な意味を明らかにしたい。